



菅沼緑 2 度目のステップス個展である。前回画廊内で大量に展示した小品は今回、事務所に 29 点。画廊内には高さ 80 ~ 110cm、幅 60 ~ 80cm、厚さ 17 ~ 22cm 程の楕円の作品を 5 点展示した。パンフレットも配布している。そこで菅沼は「作品というものがいったい何なのか、ずっと考え続けている」と記す。画廊主の吉岡まさみのブログによると、菅沼は自分の作品を「彫刻」とであると言う。上部の写真は画廊内の一つの作品の UP であるが、ここに現れる筆致は、1950 年代のアメリカ抽象表現主義者達が追い求めた筆跡どころか、それを凌駕する程までに「いま、ここ」が留められている。アメリカ抽象表現主義者達の「いま、ここ」は、目に見える世界だった。菅沼は見えない世界を描く。

我々は形而上の世界に生きている。時計を用い、共通の道徳を追い、暗黙の約束の地に立つ。芸術作品とは人間を形而下の世界に陥れる。夢中になれば時間が経ち、個人が尊重され、既存の価値観を突き破ることに意義が生まれる。それでも菅沼の作品を「絵画」という枠に落とし込むことは出来ない。私は作品の厚さと形状に、能面を思い起こした。能という特別な枠組みではなく、仮面といってもいいのかも知れない。菅沼の作品には人間が塗り込まれている。人間とバクテリアの違いは何か。バクテリアに時間と空間は存在しないため、人間より高度な生物であると再定義する必要がある。すると、菅沼の作品がバクテリアに見えてきた。我々は考える/考えないという、矛盾を往復する。

